

問題・解答 用紙番号	63
---------------	----

の解答用紙に解答しなさい。

国 語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
看護学部、農学部【文系型】（食農ビジネス学科）

問題は100点満点で作成しています。

I

1～5の傍線部と同じ漢字を含むものを、ア～オのうちからそれぞれ一つ選びなさい（10点）

1 弱点をコクフクする

ア シンコクな悩みを抱える

イ コクナンに立ち向かう

ウ そのニュースはあまりにザンコクだった

エ コクメイに記録する

オ 病名をコクチする

2 チクイチ報告をする

ア チクワが名産品だ

イ 故郷からホウチクされる

ウ ビチク品を確認する

エ 領地を守るためにチクジヨウする

オ カチクの世話をする

- 3 イカシの意を表明する
- ア イセキの発掘を行う
 - イ イゴを打って遊ぶ
 - ウ 台風がモウイを振るつた
 - エ 上司の前でイシユクする
 - オ 権限をイジヨウする

- 4 物事のゼヒを判断する
- ア ヒクツな態度をとる
 - イ 戦争をカイヒする
 - ウ 企画案のサイヒを決定する
 - エ ヒコク人と面会する
 - オ ビジヨウ階段を使う

- 5 ケンキヨな態度を見せる
- ア ケンヤクに努める
 - イ ケントウを重ねる
 - ウ ケンジヨウの意を表す
 - エ 貢ぎ物をケンジヨウする
 - オ ケントウ違いの発言をする

II 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

保守主義について考えるにあたって、「何かを守る」という原点に戻る必要があるのではないだろうか。

人はどのようなとき、何かを守ろうとするのか。当然、守るべき何かがあり、その何か脅かされているときであろう。そのままでは大切な何か失われてしまうとき、人はじめて自覚的にそれを守ろうと決意する。

大切な何かとは、自分の生命や財産、安全や信用かもしれない。しかし、人が本当に「何かを守る」という決意をするのは、自分以外の何かに関わる時が多いのではなかろうか（ふつうあえて決意をしなくても、自分の生命や財産を守ろうとするから）。 a

自分の家族や仲間、地域コミュニティ、その歴史や文化、技能や伝承、さらに自然環境や景観などを、人は守ろうとする。そして何かを守ろうとするとき、人は少しだけ、勇気や誇りを感じる。自分がやらなければ、その何かは失われてしまう。「何かを守る」ことは、その人の存在証明につながるのかもしれない。 b

ただ、問題なのは、この守るべき何か、人によって異なることだ。ある人にとって大切な何か、別の人にとってはとくに意味をもたないことは、ありふれた事態である。大切にないとはいわないが、それほど大切とは思えない。 c

保守主義にとって、しばしばキーワードになる言葉に「伝統」や「権威」がある。過去から受け継がれてきた何か、強制されなくてもおのずとそれに従ってしまう何か。こういったものが人間の精神には重要なのだと、昔から保守主義者たちは主張してきた。 d

これらのものは、人間にとっての「重し」であり、それがないと、精神は果てしなく浮遊してしまふ。自分はいかなる伝統からも自由であり、何らの権威も認めないと強がれば、かえって思考の基準がなくなる。その意味で、「伝統」や「権威」がある方が人間はむしろ主体的になるというのが、保守主義者たちの考えであった。 e

ところが今日、その「伝統」や「権威」がどこにあるのか、わからなくなりつつある。「わが国の伝統」といっても、具体的に何をイメージするかは、その人次第だろう。「父親の権威」といった言葉も、死語になって久しい（もはやパロディにすらならない）。

本来、「伝統」といい、「権威」といい、人々に共有されてこそ、意味をもつ。みんなが「伝統」というから「伝統」であり、みんなが「権威」と認めるから「権威」となる。「伝統」も「権威」も人次第であるなら、それらはそもそも「伝統」でも「権威」でもないのかもしれない。

イギリスの社会学者アンソニー・ギデنزは、^A「ポスト伝統的社会秩序」という言葉を使ってこのような事態を説明している。現代社会から「伝統」というものがなくなったわけではない。ただ

昔ながらの方法では、「伝統」を「伝統」として擁護することはできなくなっている。なぜこの「伝統」を「伝統」といえるのか、きちんと説明できないことには、もはや「伝統」として認めることはできないというのである。ギデنزにいわせれば、伝統ですら、その根拠を示さなければならぬのが現代である。グローバル化が進み、多様な人々がともに暮らす現代社会で、何が「伝統」であり、何が「権威」であるかは、当然のことながら自明性を失う。

別にそれでかまわない、自分にとっての「伝統」は「伝統」であって、説明したり正当化したりするつもりはない、という人も出てくるだろう。ギデنزによれば、そのような考え方はすでに「原理主義」的である。自分の考えを頭から正しいとして、他の人からの疑問や批判を受け付けな
いとき、それは「原理主義」的なのである。「原理主義」というと宗教や民族主義を思う人も多い
だろうが、現代的な「原理主義」はそれらに限られない。社会の至るところで「原理主義」が台頭
しつつあるのが、「ポスト伝統的社会秩序」のもう一つの側面であるといえるだろう。

そのような意味で、人々が自ら守ろうとしているものが「私の伝統」や「私の権威」に過ぎない
という可能性を認めつつ、それでも自分にとって大切な何かを守ろうとすると、現代的な保守主
義を論じる余地が生じる。

実際、本屋に行つて「保守主義」という言葉をタイトルにもつ本を探してみるといい。まずはそ
のような本の多さに驚き、次に、そこで「保守」すべきとされているものの内容の多様さに驚くだ
ろう。現代とは、保守主義がブームになる時代、誰もが保守主義者になりうる時代なのである。

このような保守主義の「再定義」に（ i ）を覚える人もいるかもしれない。保守主義とは、
本当にそのようなものだろうか。保守主義といえば、エドマンド・バーク（一七二九―一七九七）以来
の伝統をもつ政治的イデオロギーである。そこで念頭に置かれているのは一国の政治制度であり、
一人ひとりの個人が「何かを守る」といった話とは、そもそも次元を異にする話ではないか。その
ような疑問には、たしかに正当なものが含まれている。

バークは一八世紀の政治家であり、思想家である。アイルランドに生まれ、グレート・ブリテン
王国（以下、英国と表記する）の下院議員として活躍した。（ ii ） 議会人であり、ホイッグ党
（のちの自由党）の政治家として、当時の英国王であり、専制の色を濃くしつつあつたジョージ三
世との衝突をあえて辞さなかつた人物である。

アメリカ独立問題にあつては植民地の側に立つて独立を容認し、アイルランドでは差別されたカ
トリックの権利擁護につとめた。さらには植民地インドにおける東インド会社の不正を（ iii ）
するなど、一貫して自由の闘士であつたバークが、その晩年に遭遇したのがフランス革命であつた。

多くの人は、バークがフランス革命を支持すると予想した。実際、革命当初の英国世論は隣国の
革命に好意的であり、その精神にならつて英国でも改革を進めるべきであるという声が高まつた。
ところが意外にも、バークはこの革命を激しく批判したのである。革命直後の一七九〇年に早くも

『フランス革命の省察』を公刊したバークは、以後、もっぱら反革命の闘士として語られるようになる。

なぜ自由の闘士であったバークが、反革命の闘士になったのだろうか。間違いないのは、^B抽象的な政治理念に基づく急進的な改革に彼が批判的であったことである。バークはたしかに国王すらも批判したが、それは国王自らが、王国の基本的な自由の原則を破ったためである。

バークにとって、名譽革命によって打ち立てられた政治体制こそが、真の英国国制（British Constitution）であった。オランダから迎えたウィリアム3世とその妻メアリー2世が即位し、「権利の章典」を發布したこの革命によって実現したのは、まさに自由の体制であり、これを守り発展させることが、政治家バークにとっての信条となった。

英国国制は人々の自由を守るため、時間をかけ、世代を超えた多くの人々の努力と工夫によって培われてきたものである。一朝一夕に成った政治制度ではない以上、隣国の革命に事¹寄せて、安易に全面的な改造を試みるべきではない。自由の闘士であるバークは、そう信じるがゆえにむしろ、反革命の側に立ったのである。

バークにとって、フランス革命はどう映ったのだろうか。そもそもフランスにはフランスの政治的伝統や制度があり、そこには独自の自由の原則があったはずである。ところが急進化した人々はフランス的な自由の制度を伸ばし、改良しようとはしなかった。むしろ、リフォームして改良すべき建物を、面倒くさいとばかり、土台からすべて壊してしまったのである。

革命とは、すべてを更地にして、その上に理想的な政治制度を、一から作り直そうとする試みである。とはいえ、そのような急こしらえの建物が堅固なものになるはずがない。むしろ、もともとあった美点すら失い、やがてすべてが崩壊してしまうだろう。そのようなバークの予言は、ジャコバン派の恐怖政治とナポレオンの独裁によって実現することになる。

このようなバークのエピソードから明らかかなことがある。

第一に、バークの保守主義という場合、念頭にあるのはまず政治制度をはじめとする、社会のさまざまな制度であった。この場合の制度とは、必ずしも法によって明示されているとは限らず、慣習や暗黙のルールのようなものも含まれる。とはいえ、人々の間で実効的かつ安定的に作用していることが重要で、抽象的な理念やイメージはそこから排除された。あくまで具体的な制度の体系を守ることに保守主義の主眼であった。

第二に、そのような制度は歴史的に形成され、世代を超えて維持・継承されてきたものである。すなわち、バークが守ろうとした英国国制とは、あたかも伝統的な建物のように、いろいろな人がそこに暮らし、手入れをすることで培われてきた。もちろん、それぞれの時代の人間は、自分たちにとって住みやすいように改良を行う。その意味で、ただ古いままを保持したわけではけつてない。とはいえ、建物の基本構造は維持される必要があり、それが失われれば、保守は保守でなくな

る。

第三に、バークが英国国制を守ろうとしたのは、ただそれが古いからではなく、より重要だったのは、人々の自由を守ることであった。そのようなバークの最大の関心事は、権力の専制化をいかに防ぎ、歴史的に人々に認められた権利をどのように守るかに向かった。鍵は、権力の抑制均衡（チェック・アンド・バランス）を可能にするための仕組みにある。自由のための制度構想こそが、バークの保守主義にとつてきわめて重要であった。

最後に、バークの保守主義の裏側のテーマは民主主義への対応にあった。バーク自身、けっして有力な貴族の家系に生まれたわけではない。それどころか、当時、隷属的な立場にあったアイルランドの出身であり、活躍したのも下院、すなわち庶民院であつて、貴族院ではなかつた。その意味で、彼はけっして古い身分制をよしとしたわけではない。

とはいえ、バークはフランス革命による急進的な改革には断固として反対したように、直接的な政治参加の急激な拡大に対しては、あくまで慎重な姿勢を保持した。社会や政治の民主化を前提にしつつ、秩序ある漸進的な変革を目指すのが、彼の保守主義であった。

このように、もし保守主義という場合にバークに言及するならば、少なくとも、①保守すべきは具体的な制度や慣習であり、②そのような制度や慣習は歴史のなかで培われたものであることを忘れてはならず、さらに、③大切なのは自由を維持することであり、④民主化を前提にしつつ、秩序ある漸進的改革が目指される、ということを押さえる必要がある。

逆にいえば、①抽象的で恣意的な過去のイメージに基づいて、②現実の歴史的連続性を無視し、③自由のための制度を破壊し、さらには④民主主義を全否定するならば、それはけっして保守主義といえないのである。少なくともバーク的^Cな意味での保守主義ではない。

もしバーク以来の保守主義がそのようなものであるならば、なぜ、一人ひとりの人間が「何かを守る」ことから、現代の保守主義は再出発すべきであると言ったのか。その背景には、現代^Dにおける保守主義の大きな変質がある。

一例をあげれば、「保守革命」という用語法である。一九八〇年代のアメリカのロナルド・レーガン大統領や英国のマーガレット・サッチャー首相による一連の改革は、「保守による革命」とも「新保守革命」とも呼ばれた。たしかに彼らが試みた改革は、第二次世界大戦後の福祉国家のあり方を大きく転換させるものであり、その限りで「革命」という言葉を使うことにまったく理由がないとはいえない。しかも、彼らは政治的にまぎれもなく「保守」であり、「左派」や「リベラル派」を激しく批判するものであった。

そうだとすると、「保守革命」というのは、やはり自己矛盾した用語法といわざるをえない。たしかに現代の保守主義者の多くは、政治や社会の現状を激しく批判し、自らの抱く過去の理想への回帰を訴えることで、変革の道筋を見出そうとする。これに対し、「左派」や「リベラル派」と呼

ばれる側が、はるかに福祉国家の現状を維持しようとする傾向が強い。とはいえ、制度や慣習の連続性を重視し、現在する仕組みに手を加えながらやりくりしていくことに保守主義の原点があることを思えば、「革命」を目指す保守というのは、やはり奇妙な存在といわざるをえない。

なぜ、このような転倒が生じるのか。一つには、保守主義のライバルに関係がある。多くの論者が指摘するように、保守主義はフランス革命以来の進歩主義に対抗して登場したものである。この場合の進歩主義とは、抽象的な理念に基づいて社会の全面的な改造を試みる立場であり、しばしば理想主義的で、理性や体系性を重視する傾向があるとされる。このような進歩主義への対抗上、保守主義はむしろ具体的なもの、経験的なものを重視し、歴史の連続性の上に部分的な改良を志向する立場とみなされてきた。さらには人間の理性だけではなく、感情や無意識的な慣習を重視することも、保守主義の特性とされてきた。

しかしながら、現代では、進歩主義の存在自体が怪しくなっている。歴史上、進歩主義の例としてあげられるのは、フランス革命を主導したジャコバン派などの急進派、社会主義革命と計画経済を目指したマルクス主義者、さらには二〇世紀において「大きな政府」による社会改良を信じたりベラル派などである。とはいえ、このいずれも現在では、大きく衰退し、昔日の面影はない。

一方、保守主義の基盤も、静かな変化が起きている。伝統的な保守主義が基盤としたのは、貴族制などの身分制組織、地方における名望家支配、さらには人々に大きな影響をもつ教会勢力などであった。これに対し進歩主義を支持したのは、政治的・経済的・社会的に劣位に置かれた人々や、産業化とともに新たに台頭しつつある中産階級などであった。

しかしながら、貴族や名望家といった保守主義の伝統的な基盤は、現代では大きく後退したといわざるをえない。逆に、かつてであれば進歩主義を支持した中産階級の中に、むしろ現状維持的な保守主義を選択する人も増えている。結果として、ある人が抱く政治的信条やイデオロギーと、その人の社会的諸条件の間には、かつてほどの明確な対応関係が見えにくくなっている。

はたして、今日の保守主義者に、身分制の復活を支持する人がいるだろうか。伝統的な地域ホスの永続を望む者がいるだろうか。さらには、巨大な国教会による政治支配を歓迎する人がいるだろうか。その意味では、現代において保守主義を支持する人々の社会的基盤は、この二世紀で大きく変化したことになる。そうだとすれば、保守主義の内容もまた、すっかり新たなものになっているとしても不思議ではない。

今日の保守主義は、明らかにかつての保守主義とは異なる。バークの保守主義が、現代でもなお傾聴すべき内容を多く含むとしても、彼が生きた時代と今日では、その社会的基盤がすっかり変化してしまっていることを忘れてはならない。

(宇野重規『保守主義とは何か』一部改変)

問一 空欄（ i ） ～ （ iii ） に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|-------|----|-------|-----|------|
| i | ア 既視感 | ii | ア 狭量な | iii | ア 糾弾 |
| | イ 脱力感 | | イ 穏健な | | イ 隠匿 |
| | ウ 違和感 | | ウ 当節の | | ウ 指図 |
| | エ 異物感 | | エ 生粋の | | エ 弁護 |

問二 波線部 1・2 の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|------------|-----------|
| 1 事寄せて | 2 恣意的な |
| ア 口実に用いて | ア 事実に基づいた |
| イ 原因となって | イ 自分勝手な |
| ウ きっかけとなって | ウ 創り出された |
| エ 反応する形で | エ 偏っている |

問三 次の一文が入る最も適切な場所を、本文中の a ～ e のうちから選びなさい。

要するに、その人にとっては、より重要な何かが別にあるというわけだ。

問四 傍線部 A 「ポスト伝統的社会秩序」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 「わが国の伝統」としてイメージされる「父親の権威」が死語となる一方、それに代わる何かを守ろうとする動きが出ていない。
- イ 現代では「伝統」や「権威」がみんなに認められ共有されている一方、強制されなければそれらに従わなくなってきた。
- ウ 現代では「伝統」や「権威」の根拠や説明の必要性を認めない人々がいる一方、それらを求める人々が現れるようになった。
- エ 「伝統」や「権威」が消滅し人々の思考の基準ではなくなった一方、宗教や民族主義を思考の基準とする人々が出現した。
- オ 現代ではグローバル化が進み多様な人々がともに暮らすようになった一方、「伝統」や「権威」の自明性は維持されている。

問五 傍線部B「抽象的な政治理念に基づき急進的な改革に彼が批判的であったこと」を示す事例として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 当時の英国王ジョージ3世との衝突を辞さず、英国の制度の全面的な改革を支持したこと。
- イ 反革命の立場を明らかにし、名誉革命によって打ち立てられた政治体制に反対したこと。
- ウ ジャコバン派の恐怖政治とナポレオンの独裁を目の当たりにしたために、それらを疑問視したこと。
- エ 英国国制に備わる自由の原則を尊重し、フランス的な自由の制度の存在を否定したこと。
- オ 理想的な政治制度を一から作り直そうとするフランス革命を勃発直後から批判したこと。

問六 傍線部C「バロク的な意味での保守主義」の要点として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 抽象的な理念やイメージを含まず、法により明示されていることを唯一の条件とする具体的な制度の維持を目的とする点。
- イ 歴史的に形成され世代を超えて維持・継承されてきた制度を尊重し、手が増えられることが決してないように監視する点。
- ウ 自由を害する権力の専制化を防ぐため、歴史的に人々に認められた権利を擁護する仕組みの構築を最大の関心事とする点。
- エ 現実の歴史的連続性を重視の立場から直接的な政治参加の急激な拡大には反対し、古くから続く身分制の維持を主張する点。
- オ 歴史のなかで培われた制度や慣習を重視し、過去と断絶しないように民主化を前提にせず秩序ある漸進的改革を進める点。

問七 傍線部D「現代における保守主義の大きな変質」について述べた次のア～カのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

- ア 貴族や名望家といった保守主義の伝統的な基盤は消えたが、過去の理想への回帰を訴える保守主義は身分制の復活を主張するようになった。
- イ 保守主義支持層の社会的基盤が大きく変化し、従来は進歩主義を支持していた中産階級が現状維持の支持に傾くようになった。
- ウ 従来は制度や慣習の連続性を重視してきた保守主義者が、「大きな政府」による改良を訴え変革を目指すようになった。
- エ 保守主義の伝統的な基盤であった貴族や名望家に、抽象的な理念に基づいて社会の全面的な改革を試みる進歩主義が浸透した。
- オ 感情や無意識的な慣習を重視する保守主義が、宗教による政治支配を歓迎する教会勢力を基盤とするようになった。
- カ 従来は歴史の連続性の上に部分的な改良を志向してきた保守主義者が、福祉国家の大転換を目指す革命を唱えるようになった。

Ⅲ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

記憶術は、^A古代ギリシア・ローマの弁論術に淵源する由緒正しき技法であった。その名の通り、記憶力を人為的に増強しようとするテクニックだ。

現代人が何かを忘れずにいようとする場合、書きつけるための安価な紙はいつでも手に入るし、ハードディスクをはじめとする各種の外部記憶装置、果てにはクラウドまで手軽に利用することができる。けれども紀元前の古代世界においては、記憶をアウトソーシングするためのメディアが圧倒的に不足していた。紙や獣皮は高価であったし、いちいち石や金属に文字を刻むのも非現実的だ。となると頼れるのは己の記憶だけである。そこで、古来様々な記憶強化法が開発されてきた。

とりわけ暗唱の能力が強く求められたのが、弁論術の分野である。手元のメモ書きなど見ずに、滔々^{たうたう}と流れるような演説をぶつて聴衆を魅了し、弁者の主張を押し通す。古代ギリシア・ローマ世界では雄弁であることが立身出世の要件の一つでもあった。だが、議会や法廷での弁論は、時に数時間にも及ぶことがあったから、長大な演説を覚えるのも大変だっただろう。

そうした理由から古代、とりわけ古代ローマ期の弁論術マニュアルのたぐいには、応分の紙幅を割いて記憶術についての解説が記載されていた。膨大なデータをすべて頭の中で処理するためのメソッドだ。

その基本原理を、以下にまとめてみよう。

術を実践するには、三段階の準備作業が必要とされる。一つ目は、精神内での情報の受け皿となるヴァーチャルな器の作成。二つ目は、記憶したい内容のイメージへの翻訳。そして三つ目は、器の中へのイメージの配置。それぞれを詳しく見てゆこう。

まず器づくりというのは、精神の中に、建築や都市空間を建てることに等しい。具体的には、実在する任意の建物や空間を選び、居室の構成、戸口や窓、柱、階段、壁の形状や位置、装飾の詳細にいたるまで、その姿を立体的に精神に刻んでゆく。その際、この仮想建築の中を精神の目で自在に動き回れるぐらいに丹念に作りこんでおかなくてはならない。自宅やよく通う店舗、公共施設などを選べば、この刻印作業はスムーズに行くだろう。実際に場所をおとすれ、一步一步、空間構成のディテールを確認しながら、頭の中に建物をコピーしてゆけるからだ。

いきなり何で建築を覚えにやなんのだ、と思われた向きも多いだろうが、これが情報の受け皿になる。^B器それ自体に意味はない。ニュートラルな入れ物だ。たくさんの事柄を覚えなければ、あらかじめ建築を精神内にたくさん建てておく必要がある。なんならまるごと町を一つ作ったついでにいい。

続いて準備の第二段階に移る。ここでは、先ほど苦労して作ったヴァーチャル容器のことはいったん脇に置いておいて(1)、自分がこれから実際に記憶に保持したい情報に向き合う。古代にお

いて記憶術が必要とされたのは、ほとんどの場合、長大な弁論原稿の暗記であった。ということはつまり、文字で書かれた情報だ。

文字で綴られたその内容を、頭の中で、イメージに翻訳／変換してゆくわけだ。単純な例を挙げると、原稿の冒頭の単語が「らくだ」だったとするなら、砂漠を闊歩する駄獣の姿を脳裏に思い描く。続く話題として戦闘シーンの描写が来るなら、武器を振るう兵士たちのイメージを作る。とこんな具合に、演説の末尾に至るまで、内容をヴァジュアル化してゆく。

イメージを描く際、どこまで細かく文字と図像を対応させてゆくかは、目的によって変化する。原稿の起承転結の流れの中で、それぞれの主たるテーマに対応した画像が一枚あればよいということとなり、イメージを四つ作ればよい。いや、「起」の部分をさらに細かくトピック分割し、忘れないでおきたいというなら、そのトピックの数に応じた画像が必要になる。

もっと精度を上げて、「らくだ」という単語の綴りを正確に覚えておきたい——説明の便宜上ここでは日本語の単語を想定——のなら、ら・く・だ、の三文字を想起させるような、たとえばそれぞれの頭文字ではじまる「ランプ」「くつ」「ダーツ」の三つ組みの図像を用意することになる。

そして第三段階。作成した一連のイメージを、最初に準備した建築の器の中に、順番に配置してゆく。一軒家を例にとるなら、門から始まって、扉、玄関口、廊下、最初の部屋の壁、家具、窓といった具合に、その建物を分節する節目となる箇所を選び、そこに、イメージを順序だてて置いてゆくのだ。空間の節目となるこれらの箇所を、ラテン語でロクス(単 *locus*: 複 *loci* / *loca*) という。一つのロクスに一つのイメージが原則で、どこに何を置いたのかをしつかり覚えておく。ロクスどうしの間隔は、密になりすぎず、かといって遠すぎず。心の目で家の中をぐるりと巡回しながら、用意した画像を残らず配置してゆく。ロクスの数が足りなければ、隣の家も活用しよう。

^C さあこれで準備完了。あとは記憶を想起したい時に、精神の中でこの建物を巡回し、イメージに出会うごとに、その画像に託した情報を取り出してゆく。当然のことながら、巡回経路を間違えると記憶の再生が混乱してしまうから要注意だ。

いかにも面倒くさい。そんな煩雑な手間をかけるくらいなら、素直に文字原稿を繰り返し音読して直に暗記すればいいじゃないか、という声が聞こえてきそう。まさにエラスムスはその立場だ。けれども批判の前に、^D 記憶術が秘める計り知れないポテンシャルに目を向けてみよう。

まずは第一段階の建築ロクスの作成。ひとたび堅固な仮想空間を築いてしまえば、実は未来永劫何度でも使いまわせる。用済みの記憶イメージだけを消去し、器のほうはくり返し再利用できるからだ。

また情報の秩序の保証という点でも、この方法は優れている。一般に、訪れるたびに部屋の配置がころころ変わる建物などまずないから、建築を情報配置の受け皿と定めておけば、その中に配列される記憶データの恣意的な連なりに、堅固な秩序を与えることができるのだ。例えばでたらめに

並んだ一〇種類の動物を覚たい場合でも、玄関から順にそれらの画像を置いてゆけば、ロクスのほうで情報相互の結びつきを保証してくれるので、各段に覚えやすくなる（ぜひ試してみしてほしい）。

そして記憶術が秘める最大のポテンシャルを発揮するのが、第二段階の操作、つまり文字をイメージに変換する作業だ。単語の綴りを覚えるようなケースを除けば、一般に、イメージは大量の文字データを効果的に要約ないしは圧縮することができる。数百、時には数千単語の情報を、たった一枚の画像で表象することだって不可能ではない。

もちろんそのためには、イメージの作りこみが重要である。特徴のない人物が王冠をかぶって無為に佇んでいるだけの画像は、漠然と「王」を表すにすぎないが、たとえば片方の手に血がしたたる武器を、もう片方には国境地帯の要塞のミニチュア（小さな兵がいっぱい壁にとりついている）を持たせれば、一気に剣^aの存在意味合いを帯びる。さらには身に着ける衣服や装身具の形状や色彩、顔の表情や睨んでいる方角、手足のジェスチャー——そう、記憶イメージは動いてもいいのだ——などの一つひとつに細かく意味を封入してゆけば、相当に複雑なメッセージを伝えることができる。短い単語を発したり、効果音が聞こえたり、芳香や温感、味覚を伴ったついでいい。五感をフルに活用すればするほど、画像に充填^{じゅうへん}される情報の密度は上昇してゆく。

もうひとつ、記憶イメージの特性として忘れてはならないのが、画像の強度だ。つまり、ありきたりな映像を作るのではなく、極端なもの、度を越して美しいか醜いかするもの、桁外れに滑稽であったり悲惨であったりするもの等、とにかく見る者をどきりとさせる強烈な存在として、記憶イメージを作成することが推奨される。さきほどの王が持つ剣が血で染まっているのはこのためだ。こうした性質を帯びた画像は、精神に、とはつまり記憶ロクスに強烈に刻印されて、めったなことでは忘れられなくなる。

記憶術とは畢竟、鮮烈なイメージが持つ情報圧縮力と持続性に、建築が有する空間秩序を巧みに組み合わせ、膨大な情報を直感的に操作することを可能にするテクニックであった。

古代の記憶術は、一部では批判を受けつつも、弁論家の必須の素養として広く認知されていたようだ。^{*}キケローもおそらく活用していたか、少なくともその原理の詳細に通曉していた。

それが中世になると、いったん下火になる。術を解説した古代の書物の多くが失われ、また世の中の仕組み自体が、弁論術をかつてほど必要としなくなったことなどが原因だ。ただし記憶術の伝統の一部はキリスト教の宗教的瞑想の実践に取り込まれ、修道院文化の中で独自の変容を遂げた。ここではその経緯を詳しく追いかける余裕はないが、中世における記憶術は、古代のものとは別系統の思索装置へと発展を遂げた、とひとまずは整理しておこう。

そして問題のルネサンス期。この蒼古たる術が、意外なことに、この時代に大流行を見た。それは古代文化への単なる憧れではすまされないほどの熱狂ぶりであった。

ほどなくして、記憶術は世俗化する。かつては弁論家の特殊技巧であったものが、いまや学生や商人、官僚、文人、学者などにも手軽に実践できるテクニックとして広まったのだ。その傾向を後押ししたのが、術の教則をまとめた安価で手軽なマニュアル類の印刷出版であった。「記憶術文献」という新しい文芸ジャンルがここに確立し、いくつものベストセラーを生み出してゆく。

初期の代表的な教則本としては、イタリア出身の法学者ビエトロ・ダ・ラヴェンナ（一四四八一—一五〇八年）のラテン語著作『フェニックス、あるいは人工的記憶』（一四九一年）がある。本文二〇ページ弱ほどの小冊子で、図版はなく、記憶術の教則と実践例のみが簡潔に記載されている。この手軽さが受けたのか、各国語にも翻訳されながら十七世紀いっぱい増刷を重ねた。

ではなぜこのような古いテクニックがルネサンス期に華々しく甦ったのだろうか。もはや紙の入手が容易になり、印刷術さえ発明されていた時代である。何も頭の中に苦勞してイメージをぎゅぎゅ詰め込まずとも、記憶を外部媒体にアウトソーシングしたければ、ノート冊子や印刷本を頼ればよいではないか。その答えはやはり、この時代を震撼させた情報爆発に求めることができるだろう。

印刷術の誕生は、記憶術をお払い箱にしたのでは決してなかった。そのことを伝える興味深い書物がある。中欧地域で活躍した記憶術師ランベルト・トマス・シェンケル（一五四七—一六三〇年頃）の名を冠した、『記憶術の宝物庫』（一六一〇年）なる著作だ。記憶術の基本教則ばかりか、それを応用して効率的に勉強を進める方法なども開陳されており、当時この術に期待されていた世俗的役割の一端を垣間見ることができる。

まさにその応用例の解説の中で、こんな警告に出会う。ここで説かれている記憶術的読書法を実践して、書物の内容を効率よく理解してゆくべし、さもなければ、無限に大岩を運び続ける神話のシジフォスのごとく、果てしなく同じ本を読み返すはめになり、たちまち短い人生を消尽してしまうだろう、と。あふれる印刷本の海を泳ぎ切るのに、記憶術を活用すべきと考える人々がいたということだ。

簡便なマニュアル本の大量流布が記憶術の流行に大きく影響していたことは、先に触れたとおりだ。ただし、^F印刷術と記憶術の関わりはもう少し深いレベルで考察する必要があるようだ。

たとえばヴェネツィア出身の文人・出版業者ルドヴィーコ・ドルチェ（一五〇八—一〇一六八年）が刊行した『記憶を増大させ保持するための方法についての対話』（一五六二年）というイタリア語の本がある。当時の典型的な記憶術教本のひとつであるが、ロクスとイメージの作成法には、大変興味深い記述がみられる。

いわく、ロクスとして設定する空間は身近な建築に限らず、諸外国の街並みや自然界の様々な場所、果てには天国や地獄のヴィジョンさえも活用可能だという。だから外国へのロクス採取旅行は大いに推奨されるし、それができない場合には旅行記や歴史書、世界地誌学^{コスモグラフィ}などを読めば参考になるという。ごく当たり前のようにこうした助言ができてしまう背景には、当時この種の印刷刊行物が手軽に入手できる環境があつたからだろう。また世界地図を眺めるのもよい、としている。それらが描き出す世界各地の多様な地誌情報をもとに、記憶のロクスを考案してゆくのだ。

ドルチェは同様の助言を、イメージの作成についても行っている。たとえば様々な職業の人物の画像が必要な場合には、職業百科的な書物や辞書類を参照するとよい。神話の神々や英雄の姿が必要なら、テイツイアーノをはじめとする画家の作品を参考にしたり、図版入りの書物を眺めたりすればよい、というのだ。

こうした発言からは、印刷術と記憶術とが密接不可分な関係にあつたことが読み取れる。なかでも重要なのは、記憶の器を構築する際、実際に自分で訪れた空間ではなく、書物から得た情報をもとにロクスを自由に設計してもよいという点だ。しかも世界地図や、各地方の地誌情報を満載した書籍が有益だというから、これはもう、世界規模の広がりを持つロクスやイメージだって作れることになる。言葉を換えるなら、印刷本を活用することで記憶術が百科全書的性格を帯びるようになったのだ。

(桑木野幸司『ルネサンス 情報革命の時代』一部改変)

* キケロー……古代ローマの政治家・雄弁家(前二〇六―四三年)。彼の弁論術に関する著作は、同じく古代ローマのクインティリアヌス(三五頃―一〇〇年頃)の著作『弁論家の教育』などとともに、ルネサンス期の人文主義者たちに大きな影響を与えた。

問一 波線部 a・b の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | a 剣呑な | b 畢竟 |
|-------------|----------|
| ア 危険で不安を感じる | ア 極端にいえは |
| イ 面白味を感じさせる | イ 結局のところ |
| ウ 奇妙な雰囲気のある | ウ 大体において |
| エ 現実離れをしている | エ 例えていうと |

問一 傍線部 A 「古代ギリシア・ローマ」において記憶術が必要とされたのはなぜか。その理由として適切なものを、次のア～オのうちから二つ選びなさい。

ア 古代世界には現代人が用いるような外部媒体が存在しておらず、記憶をアウトソーシングすることができなかったから。

イ 紀元前の古代世界では紙や獣皮を手軽に利用することができず、それゆえ自身の記憶力を頼りにするほかなかったから。

ウ 古代世界では時に数時間にも及ぶような演説が行われたが、そのすべてを石や金属に刻むことは現実的ではなかったから。

エ 雄弁が立身出世の要件の一つとされた古代世界では、弁者は演説において長大な弁論原稿を暗唱しなければなかったから。

オ 古代世界では弁論術のマニュアルに記載された記憶術以外に、記憶力を人為的に増強するためのメソッドがなかったから。

問二 傍線部 B 「器それ自体に意味はない」とは、具体的にはどのようなことか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 器は仮想の建築物にすぎないので、器となる建物の多寡は記憶の容量と関係がないということ。

イ 器はヴァーチャルなものにすぎないので、器となる建物が実在しない方が望ましいということ。

ウ 器は情報の受け皿にすぎないので、器となる建物はよく通う店舗でも自宅でもよいということ。

エ 器はニュートラルな入れ物にすぎないので、器となる建物は緻密に作る必要はないということ。

オ 器は精神の中に築かれた建物にすぎないので、器となる建物には戸口や階段は不要ということ。

問四 傍線部C「さあこれで準備完了」とあるが、記憶術を実践するための準備作業の一つとして最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。ただしここでは、本文中に見られる「らくだ」という単語から始まる原稿を暗記することとし、記憶の器は「一軒家」を用いることとする。

ア 「らくだ」にふさわしい場所として砂漠をイメージし、その砂漠に建つ「一軒家」の画像を精神内に配置する。

イ 「らくだ」を想起させる映像を「一軒家」の中に配置したのち、次の場面についての画像を隣の家配置する。

ウ 「らくだ」という綴りを暗記するために画像を三つ準備して、それらを残らず「一軒家」の玄関口に配置する。

エ 「らくだ」の画像を原稿の起承転結の流れに合わせて四つ作成し、それらを「一軒家」の節目ごとに配置する。

オ 「らくだ」がゆつたりと歩く姿を思い描き、その画像を最初一枚として「一軒家」の入り口の門に配置する。

問五 傍線部D「記憶術が秘める計り知れないポテンシャル」とあるが、このポテンシャルに関する記述として適切でないものを、次のア～オのうちから一つ選びなさい。

ア 記憶の受け皿となる建築の器を一度しっかり築いてしまえば、器それ自体は何度でも繰り返し利用できる。

イ 記憶すべきデータを建築の器の中に順に配置していくことで、情報相互の結びつきを強めることができる。

ウ 効果的に文字データを圧縮することで、複雑な単語の綴りであっても一枚の画像で表象することができる。

エ 綿密にイメージを作りこむことで画像の情報密度を高め、相当に複雑なメッセージを伝えることができる。

オ 極端に滑稽であったり悲惨であったりする画像を作成することによって、記憶を持続させることができる。

問六 段落 X には次の五つの文が入る。正しい順番に並び替えたとき、三番目に来る文はどれか。次のア～オのうちから選びなさい。

- ア ネイティヴと変わらぬ純正ラテン語を操るためには、修辭技巧の洗練が欠かせない。
- イ 古代の人工的記憶強化法についての比較的まとまった言及が見られるキケローやクインティリアヌスらの弁論術著作を読み込むことで、おおよその原理は復元できる。
- ウ きっかけは、人文主義者らによる古典文献の発見と研究だ。
- エ そのために必要な知識は、古代の弁論術の中に体系化されているはずだ——とする世情のなかで、記憶術に対しても注目が集まった。
- オ よく分からない部分については、独自の解釈を加えるなどして対処すればよかった。

問七 傍線部 E 「ルネサンス期」の記憶術について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 記憶術は宗教的瞑想の一環として普及し、修道院で実践されるようになった。
- イ 印刷術の発明によって原稿を暗記する機会が減り、記憶術の価値が低下した。
- ウ 記憶術の原理を詳述した大部の教則本がベストセラーとなり、増刷を重ねた。
- エ 商人や官僚よりも、学問に携わる学生や学者たちの間で記憶術が大流行した。
- オ 大量の印刷本を効率よく理解するための読書法として、記憶術が活用された。

問八 傍線部 F 「印刷術と記憶術の関わり」の具体例として適切なものを、次のア～オのうちから二つ選びなさい。

- ア 各地の地誌情報を満載した書籍が印刷出版されたことで、異国の街並みをもロクスとして使用できるようになった。
- イ 神々や英雄を描いた画家の作品が印刷出版されたことで、それらの画像をイメージ作成に利用できるようになった。
- ウ 世界地図や旅行記が印刷出版されたことで、実際に人々は外国を旅行して多様なロクスを採取できるようになった。
- エ 職業百科的な辞書類が印刷出版されたことで、様々な職業の人々が必要となるイメージを活用できるようになった。
- オ 世界地誌学の本が印刷出版されたことで、天国と地獄を除いて様々な場所をロクスとして設定できるようになった。